

# 臨床獣医師から見た

# 養鶏業界 75

(株)ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

## 養鶏産業近代化の道程 採卵業界の推移

著者が養鶏産業に携わって既に45年が過ぎました。臨床獣医師として最初に養鶏産業にかかわったときには、飼料コストは20kg紙袋入りで2400円、1羽単位で換算すると1万2400円でした。当時の著者の月給は2万3700円で、1ドルは360円でしたから、現在の価格で4万円ほどに当たります。

それでも、160円の相場は低卵価であり、そのような時期の経営は楽とは言えない状況でもありました。しかし、1万羽の採卵養鶏を経営していれば、平均的に月収70〜100万円にもなりました。何せ「100万長者」という表現が生きていた時代ですから、現在の貨幣価値に換算すれば、年収8000万円〜1億円にもなります。

3〜4年おきに訪れた低卵価を乗り越えれば、高卵価の度に規模の拡大が可能でした。その時流に乗って規模を大きく拡大し、企業化への道を

辿った生産者、あるいは規模を維持したり、身の丈にあつた拡張をしたりしながら利益性を中心として農家養鶏スタイルをモットーとする生産者の2タイプに分化してきました。

現在でも1万羽養鶏を経営し、1kg当たり3000円もの利益を上げている経営体も少なくありません。

## 利益性重視への回帰

需要が頭打ちで、ある企業の売り上げが伸びると、同業他社の売り上げが減少するという今日の採卵業界を俯瞰して、

①利益性の悪さを規模でカバーし、利益を確保しながら量販店の要望に応えられる生産者（激しい競争に耐えながら切磋琢磨する大型化への道）  
②家族労働を中心として地場での直売により確実に再生産できるスタイルをとる生産者

の2者を見据えたとき、後者を改めて見直そうという気風が生じています。

こうした回帰の現象は、大手流通



の厳しい要求に応えることで、100万羽を超えるサイズで激しく競争している大型生産者と比べると、中小規模の生産者は時代の要求に 대응することができにくくなってきています。それを前提としたこの業界で、生き残っていくためのサバイバル戦略とでもいえるでしょうか。

## 変貌したブロイラー業界

40年あまり前に日本に上陸したブロイラー業界も大きく姿を変えました。関西地方で「かしわ」と呼ばれた鶏肉はもっぱら廃鶏肉でした。それも当時は群全体を一度に淘汰するのではなく、1羽ごとに産卵性を確認して採算に乗らない個体を選んで淘汰するというきめ細かい運営が主体でした。そこへ、ケンタッキーフ

ライドチキンという斬新な商品を旗頭に、柔らかさを売り物にしたブロイラー肉が市場へ現れたのです。

当初国産ブロイラーで席卷していた鶏肉市場は、国際化の波に洗われて、市場を外国製品に明け渡しつつあります。しかし、味を前提とした国産鶏肉のシェアは一定比率を維持し、価格のみですべてが決せられるものでないことも示しています（現

## 《コラム1》

### 【現在の1万羽採卵養鶏の実力】

連載の最初にも触れましたが、1、2万羽採卵養鶏はちょっとしたものです。4月初旬の全国養鶏経営者会議からの状況情報で、1万羽採卵養鶏経営者からの内容紹介記事がありました。その方は直売によって400円/kgの利益を確保し、さらに格外卵を無駄にしないためにケーキなどの加工も手掛けておられます。500kg/日の生産量で換算すれば年間6,000万円もの利益性が確保されることとなります。先日の日経記事に「相対的な流通マージンが55%にも及ぶ」ことが紹介されていました。この流通マージンを取り込むことの重要性を実感させられます。

在の国産ブロイラーシェアは60%弱)。奪われた国内市場の半分を担当していた生産者は職を奪われ、業界外に去ったことを意味します。

最近では、生産方法の特殊性をブランドとするために「無薬」を謳うものも目を引きまします。中には「ワクチンを使用することまで制限しようとする流通サイドの圧力さえある」と聞いています。単位面積当たりの飼育密度が高く、衛生管理に苦慮するブロイラー飼育環境で薬剤を使用しない場合、生産効率が悪化することは避けがたい問題です。

さらに、ブロイラー産業で常に頭を悩ます大腸菌症や出血性腸炎、コクシジウム症などを、薬剤に頼らずコントロールすることは困難を極めます。

敢えてブランドを維持するため生産性を犠牲にしていると、経営体の存亡を左右する危機が訪れます（大腸菌症などの発生には一筋縄ではいかない、潜在的な要因が隠れているようです。根本的な対策には、今よりさらに深い検証が必要と考えています）。

## 畜産薬の変遷

投薬といえば、著者が業界に接した45年も前には、今から考えれば信じられないような薬の使われ方が当たり前でした。例えば、抗生物質ではマクロライド系のタイロシン、オ

レアンドマイシン、スピラマイシン、広範囲抗生物質としてのテトラサイクリン、オキシテトラサイクリン、クロルテトラサイクリンは採卵鶏に頻用されていましたし、合成抗生物質のネオマイシンやブドウ球菌のよ

うなグラム陽性菌に効果てきめんのクロロマイセチン、合成抗菌剤（チアンフェニコールなど）、フラン剤（代表的なものはヒナ白痢を主とするサルモネラ症対策を目的としたフラゾリドン）、あるいは各種サルファ剤がさまざまな感染症への予防や治療に使用されていました。

制限がかけられ、鶏肉・鶏卵への残留が防止されるシステムが機能しています。

実質上発生した感染症への治療は困難になりました。そのため、伝染性感染症の予防はそれまでも増して重要視されるようになりました。予防に役立つワクチンへの期待が高まったわけです。

著者が業界に接した当時（1965年・昭和42年）に市販されていたワクチンは、ND不活化ワクチン、鶏痘ワクチン程度でした。その年に鶏伝染性脳脊髄炎のワクチンが市販されましたが、多くの伝染性疾患に対するワクチンは、その後に順次開発市販されたものです。現時点ではウイルス性あるいは細菌性感染症に対するワクチンが市販されています（それぞれの経過については、これまでに解説してきました）。

## 賞味期限

昔、卵は保存可能な食材という意識が強かったように思います。本来

## 《コラム2》

### 【賞味期限】

賞味期限は製造者が自主的に決められます。製造後、どれほど長期の保存に耐えられるか、限界値を出し、その半分に設定すればよいのです。仮に製造した食品の常温保存可能期間が60日間であった場合、賞味期限は30日とされます。

卵を冷蔵庫で保存すれば、180日ほどは十分に食用に供することができます。先の例に倣えば、賞味期限は90日であっても大きな問題は生じません。しかし、もしSE菌などのサルモネラで汚染された卵であれば、リスクは大きく拡大されます。そこで、ハンフリー博士のデータに基づいて、低温保存で菌繁殖のレベルが低い2週間に設定しているケースが多いのです。もちろん、汚染のない卵であれば、保存期間が1~2週間延びても、理論的には問題ありませんが、若い世代では、賞味期限が過ぎれば捨てている家庭が多いのが実情です。

卵の消費量には隠れた一面があるものです。

「食の安全性を確保したい」という消費者の意向がマッチして賞味期限が設定されました。

また、食品としてのパック卵の位置付けも確立してきました。それに従って、生産者の意識にも高いレベルが要求されています。例えば、先付けと称される先作りという生産行動です。かつて（昭和32~40年当時）牛乳は瓶入りでした。瓶のフタには製造日が

は21日間親鶏が37℃に温めてヒヨコになるわけですから、そう簡単に傷んでは困ります。しかし、これまでも述べたように、17~18年前にテールブルエッグで問題になったSE菌の汚染が食中毒の原因としてセンサーションを巻き起こし、冷温保存下での賞味期限を設定することでリスクを回避できるというコンセプトと、

印字されていましたが、3~4日先付けされているのが当たり前でした。しかし、今日それをしたら、どのような食品であっても「食品衛生法違反」です。マーケットでそれが発見・発覚した場合、最悪の場合には売り上げ補償のほかに5大新聞に謝罪広告を出さなければなりません。最低でも1社当たり300~400万

円ですから、2000万円もの金額が謝罪広告で吹っ飛ぶことになりま

す。これを利益でまかないますから、3~4億円の売り上げは、これを埋めるために消え去ります。低卵価の最中であれば死活問題です。

一方で、マーケットと鶏の生理にはギャップがあります。鶏は毎日同じペースで産卵しますが、マーケットでは週末に購買が集中します。従ってオーダーも金曜、土曜、日曜に

合わせて多くなりますが、その分平日は少ない注文に悩まされます。「新鮮な製品を届けたい」と誠実に努力すればするほど、ジレンマに振り回されることになります。

こうした問題をどのように解決するのか、個々の生産者の工夫がモノをいう時代なのです。

また、養鶏経営体の件数レベルでは4分の1程度の採卵農場で芳しくない産卵成績に悩まされているようです（羽数ベースでは10%を超える程度と想像しています）。表面上、MGやMSで片付けられたり、IBとして取り扱われているようです。しかし、市販のワクチンをどのように使ってみても成績が改善されません。

## その他の生産性阻害要因

現代養鶏産業は装置産業へと変貌しています。コンピュータ化した機械が環境をコントロールし、エサを配り、水を与えます。そして、個々

のデータもコンピュータが処理します。換気装置が壊れれば、数時間でその鶏舎の鶏は全羽数が死亡します。実際、変圧器のエラーで6万羽が午前の数時間で全滅した事例が起きています。機械に習熟したスタッフが必須の時代です。

ための採算性障害をどのように解析すべきかを検証しはじめ、いくつかの問題点が浮かび上がってきています。具体的な対応に手を付けるためのアイデアを専門家と相談し、テストを計画しています。

これまでも、さまざまな分野で専門家が挑戦してきた問題点ですから、容易に答が見つかるとも思いませんが、臨床獣医師として生産現場で生きてきた著者にとっても、まだまだ



鶏に教わりながら解明したい問題が山積しています。

これまで6年間に渡って、著者のヒストリーを紹介しながら、臨床獣医師の立場からみた養鶏業界を紹介してきました。

HPAI問題はこれからも大きな課題を業界へ突き付けるでしょう。サルモネラ菌汚染の回避も重要です。未解決な鶏病の追跡も何とか成し遂げたいものです。

しかし、それにも増して重要な課題はスタッフの育成です。若い世代が夢を持って働ける業界へ……：こそが、著者の夢でもあります。

夢のある業界への道を拓きたい。それを願って業界へ入ってきた著者であることを改めて心にしなが、ペンを置くことにしましょう。

長い間、お付き合いいただき、ありがとうございます。また、筆の遅い著者にとって、毎月ご迷惑をおかけしたのに辛抱強く我慢していただいた本誌の編集部の歴代スタッフの方々に改めて感謝いたします。

完

